

国語 解答一覧と配点

大問	小問	正解	配点案	解 説	
一 50 点	問一	①	イ	2 点	肯定 ア荒涼(寥) イ首肯 ウ発(酩) 酵 エ控訴 オ鋼鉄
		③	エ	2 点	幼児 ア妖怪 イ洋行 ウ舞踊 エ幼虫 オ中庸
		④	ア	2 点	出自 ア独自 イ慈善 ウ炊事 エ滋味 オ支持
		⑤	ア	2 点	顕在 ア顕彰 イ謙虚 ウ懸垂 エ堅固 オ陰悪
		⑥	オ	2 点	感謝 ア煮沸 イ恩赦 ウ遮光 エ射程 オ謝恩
	問二	②	ウ	2 点	同義語は“根本”、“根源”。
		⑦	エ	2 点	本人には知られずに、その人のために何かを行う様子。
	問三	ア	4 点	傍線部 (a) は「存在の承認」について述べており、傍線部のあとに「他人の迷惑にならないかぎり」は「どのような行為」「どのような考え方」でも認める、とある。ウ「不変の基準があり」「行為の善悪は無視してかまわない」が不適。イ・エは本文にない内容のため不適。	
	問四	イ	5 点	空欄補充は、空欄の前後の関係に注目する。Aの前では、「存在の承認」の原型が「親和的承認」と述べられているのに対して、あとでは「親和的承認とは異なる」承認もあると述べられているので、逆接の接続語が入る。Bは、あとで新しい内容が加わっている。Cは「存在の承認」の「保証」で自分が否定されず、その結果「存在の承認」は「自由の承認」といえると空欄の前後で因果関係が成立しているので、「だから」が入る。Dは、空欄の前の「一定の共通了解」の例を空欄のあとで述べているので、「たとえば」が入る。	
	問五	ア	5 点	「これ」の原因を問われている。傍線部 (b) を含む一文を読むと、「これ」の前に述べられた「自分の行為や存在を否定」されることへの「危機感」が原因で、「これ」＝「異質な存在への嫌悪」が発生すると述べられている。イ「行為の尊厳が冒されてしまう」、ウ「見知らぬ人や価値観が異なる人を否定する」、エ「嫌悪感を前面に出す」が不適。	
	問六	ウ	5 点	民主主義社会では、構成員がお互いの自由を尊重し、侵害しないためのルールが必要となるが、その基準となるのが「一般意志」である。傍線部 (c) を含む段落の冒頭に「こうしたみんなの意志」を「一般意志」と呼ぶと述べられているので、前の段落に示された「共通了解」も「一般意志」にあたる。またウで述べる「善悪の価値基準」とは、文化や生き方、思想、信条が異なっても、ほとんどの人が納得するもの（共通了解）であり、これが適切。ア「国家が中心となって」、イ「それを危惧した一般市民から生じた」、エ「誰も妨害することはできない」がそれぞれ不適。	
	問七	エ	5 点	空欄Eの前に「これは」とあるので、その前の「困っている人を助けたり、苦しんでいる人を慰め」るような行為が空欄Eを意味する行為を指すとわかる。一般的な意味では道徳的な行為であり、「道徳的」と類似した「倫理的」が適切である。上記の行為は「感情」にまかせた行為ではないし、「論理」や「理知」によってなしうる行為でもないことから判断できる。	
	問八	イ	2 点	「普遍」とは、広く行き渡って、全てにあてはまること。	
	問九	ウ	5 点	「自由と承認の葛藤」については空欄Cを含む段落で「自由な行為に対する価値評価が問題になるときにのみ」現れると述べられている。「自由な行為」が保証されているのは、近代における民主主義社会でのこと。また、最終段落で「自由と承認の葛藤」が説明されている。「価値観の多様」な現代社会では「自由への欲望を満たせば承認への欲望」を満たすことができず、逆に承認を満たすために自由を犠牲にしている。つまり自由であることと、承認が葛藤している状態になるというのである。ア「自分の思想・宗教にまで他者が自由に口を出す」、イ「そ	

二 50点	問十				のようにしなければ承認されることがない」、エ「価値基準を統一しようとする恣意的な動き」が不適。
		エ		5点	ア「存在の承認」が「他者への愛情なしには」とは述べられていないので不適。イ「一定のルール」が「行為の承認」のためにつくられるという説明が不適。ウはヘーゲルからルソーへと原理が進歩したとは述べられていないので不適。エの前半は現代の民主主義社会での説明であり、後半は最後から2つ目の段落の内容と合致する。
	問一	①	イ	2点	「だんまり」とは、黙っていること。
		②	ア	2点	「耳打ち」は、相手の耳にそっとささやくこと。
		③	エ	2点	「落ち度」は、失敗、過失。
		④	ウ	2点	「起承転結」は、物事の順序や組み立てのこと。もともと、漢詩の絶句での句の並べ方。
	問二	ア		4点	新の問いに対し、(a)の前の「ハイどうぞ」はすぐに返していたが、(a)のときは間を置いているため、言葉を選んでいる様子が見られる。その後も「なんとも言えなかった」と言っているので、直接は批判していない。(b)では新の言葉に「次はあのパーマが意思を持つ話撮ればいいのに」と言っている点や、「とても楽しそうだ」とあることからアが適切。
	問三	ウ		4点	ナツ先輩は映画の監修を引き受け、学生スタッフにアドバイスをした際に感心されても、「いつもと変わらない表情」であった。また、自分の名前が映画のエンドロールなどにクレジットされるのを嫌がっていたことなどからウが適切。ア「撮影に不満」が不適。あとで「撮影自体は楽しかった」と言っている。イ「学生スタッフに幻滅」、エ「感動はしながらも」以降が不適。
	問四	イ		5点	傍線部(d)での「危ない」という意味を本文全体から考える。ナツ先輩の、「この人達がわかってもらおうと思ってないんだから」「みんながわかる面白いもの……誰にだって創れる」などの発言から、ナツ先輩の映画に対しての不安を説明したイが適切。ア「自分の理想」が不適。制作される映画にナツ先輩が理想を持っていたのではない。ウ「高尚な感覚の人間にしか評価できない」という評価が不適。エ「使命」についての説明が本文からは読み取れないので不適。
	問五	エ		4点	擬態語には辞書的な意味もあるが、そこから作家の感性で発展した意味もある。ただし、辞書的な意味を中心に考えるべきである。空欄Aは、新がナツ先輩の問いかけにクーリッシュを食べながらうなずいている様子。「とくとく」は液体が注がれたり、脈を打ったりする様子。「びくびく」は恐怖におののく様子。「しくしく」は悲しくて泣いている様子。「こくこく」は飲料を飲んだり、上体が前後に(居眠りで)揺れ動いたりする様子。以上から「こくこくと」が新のこの場面での様子に近い。空欄Cは、新が女の子に「枯葉を踏みのを楽しむ小学生のように」、軽快に近づいていく様子を表す言葉が入る。「そろそろ」はゆっくりと行う様子。「うろうろ」は目的のないまま歩き回る様子。「ぐんぐん」は勢いよく行う様子。「さくさく」は滞りなく行う様子。A・Cの両方にあてはまる組み合わせとなっているのはエ。
	問六	イ		5点	傍線部(e)直前のナツ先輩のせりふの内容、またナツ先輩を「魔法使い」のようだと尊敬していた新が、今は先輩を「魔法の使えなくなった魔法使い」と述べていることなどからイが適切。ア「神経質」「過去の失敗談」、ウ「理解可能な存在に変わり」「うれしさ」、エ「冷静になる必要」が不適。
	問七	エ		5点	サークルの作った映画に対して、完成披露試写会直後は「わからない」と否定的だったナツ先輩だが、その後に妹の話を始め、「何をしたら認められるのかわからない世界」「見る人が見たら、わけがわからないって切り捨てられるような世界」に妹も自分もいると言っている。以上からエが適切。ア「いつかは評価され

				る」、イ「価値がないものだ」が不適。世の中の少数しか認めてくれない世界であることへの言及はあるが、自分達の芸術を「価値がない」と否定しているわけではない。ウ「無限の可能性を秘めている」が傍線部の主張とかみあわず不適。
	問八	イ	5点	比喩表現の問題。空欄Bのあとに「背筋のあたりを貫いた」とあり、また、女の子をモデルにするのは、この場面で突然ひらめいたことなので、その点を踏まえて考える。
	問九	エ	5点	傍線部（g）は、ナツ先輩のはげましの言葉を受けて人物画が自分の向き合うべき道だと思い、すぐさま行動に移そうとしている新の描写の一部である。目の前に現れた女の子をモデルにして画を納得のいくまで描きたいという新の心情を読み取ること。エはその点を踏まえた説明になっており適切。ア「ナツ先輩が…」ももとは人物画が得意であった」が不適。ナツ先輩が気づかせてくれた内容が異なる。イの前半は正しいが「断っても」「義務」が読み取れない。ウ「有無を言わせぬ迫力に満ちていて」「懇願」という態度が過剰な表現であり、それぞれ不適。
	問十	イ	5点	小説では、作者独自の表現技法や工夫が見られ、それが設問になることが多い。ア他にも「ゆらゆらと」「こくこくと」など擬態語は多く用いられている。「初夏の風が……縫っていく」という描写は、人間でない風が人間の動作をしているようにたとえたもので擬人法であるが、「地を這って」は人間である学生スタッフが苦心する様子を比喩的に表現しているので擬人法とはいえない。イ会話文に「ハイ」「!!」はあえて用いていると考えられる。「魔法使い」が二つの場面で用いられてナツ先輩への気持ちに変化が起きており、新の気持ちの変化とアイスの描写が交互に描写されていることから、イが適切。ウ「若者言葉」の説明の中の「無責任さを強調」が不適。ここでの「若者言葉」は、上映されている映画の内容についてのものである。後半の「『いつもと変わらない表情』『なんとなく歩いている』」は新の視点を含んでおり、「客観的」とは言えない。エ文末表現については、小説ではよく見られる手法であるが、例えば「単純なことだった」と過去（完了）の文末になったあと、すぐに「歩き出す。近づく」と現在形を用いているように、現在形は時間の変化をつけるというより、登場人物のその場の動作や思いに臨場感を与えるものとなっている。「過去と現在の間で揺れ動く」様子を表しているわけではないのでエは不適。